

### つなげよう知の拠点 2011 愛媛県立図書館長 川崎 清明

「椰子の実は、二つある」

「あきないのススメ」

明治31年、とある夏の日の朝。

愛知県の渥美半島伊良湖岬にある、恋路が浜を一人の学生が散策していました。彼は恋人に先立たれ、失意をいやすために友人のふるさとである伊良湖に来ていたのでした。

ふと砂浜を眺めると、どこか遠い海の彼方から流れ着いたと思われる、椰子の実が転がっています。おそらく気の遠くなるような時間をかけて、遠い南の島から潮流に乗って遙々とやってきたに違いないのでした。

やがて、このエピソードから、二つの果実が収穫され、ご存知の国民歌謡「椰子の実」と同時に民俗学の父・柳田邦男の「海上の道」の構想が生み出されました。

歌手・東海林太郎(しょうじたろう 1898年～1972年)が燕尾服・直立不動で歌う姿を懐かしむ方も多いと思いますが、ニュートンのリンゴの樹のエピソードに似て、人は、ぼんやりと眺めているときに、絶対的な真理に出会うことが多いようです。

椰子の実の旅を思い、旅情豊かな詩情へと結びつけた人、はたまた、椰子の実から時代を飛び越え、文化の伝播したであろうルートが存在へと思いを馳せた人と、たった一つの椰子の実から創造は広がりました。

ところで、「道」という文字の成り立ちは、征服者の祈りが込められている話を聞いた記憶があります。すなわち、「道」は、征服者が、敵側の首をはね、その首をびっしりと敷き詰めて、通路＝道をつくりあげた事実が、語源となっているそうです。

多くのまがまがしい事物が行き交う「道」。「辻」には、「道祖神」が祭られ、坂道の間、すなわち「峠」は「手向け」が語源となっています。手向けて、祈る場所だったということでしょう。

私の耳には、「椰子の実」が「癒しの実」に聞こえてくるような感じすらしています。

今年は、なんといっても、東日本大震災関連のニュースが記憶に残ります。「想定外」や「未曾有」ということばを見聞きすることの多い今日この頃です。

不自由な暮らしが長引き、あれこれと支援され続けるもどかしさが募る中、被災者の皆さんの今の心境を問いただすような関わり方を回避し、一人ひとりに寄り添い耳を傾けることが大切だ」と、臨床心理の専門家は指摘しています。持続的かつ計画的な「心のケア」が、生活課題として浮き彫りになっています。本県でも、県立学校等の養護教諭等を災害派遣し、少しでもお役に立てるよう、被災地への支援を継続しています。

ところで、愛媛では、宝永地震(1707年)の規模が一番大きいとされています。あくまでも推定値にとどまりますが、マグニチュードが8.4乃至8.6とされており、このとき、富士山が、大噴火したそうです。身近な話としては、お膝元の道後温泉の源泉が止まったそうです。

「天災は忘れたころにやってくる」の名言は、漱石山脈のひとり、高知県出身の寺田寅彦のことばのようですが、改めて、肝に銘じておきたいと思えます。

お寿司屋さんの湯飲みには、春、夏、冬の文字が書かれています。なぜか、秋の文字は書かれていません。そして、これが商売の秘訣だとされています。

戸惑いの多い一年目を経て、県立図書館長として二年目を迎えています。私なりに図書館像を模索していますが、なかなか、「これからの図書館像」は浮かんできません。あれこれと模索するうちに、あきらめないこととチームワークの大切さが身に浸ってきました。

要は、図書館に関わるすべての人々を信頼し、彼らへの連帯を強く希望しつつ、より確かな「知の拠点づくり」の輪を少しずつ広げていくことなのではないでしょうか。

さて、みなさんは、「何を継続していますか？」

## 「講演会とシロアリと」(子ども読書係 2011)

子ども読書係では、「子どもと本の出会い推進事業」として、年間をとおして、ブックトークや各種の研修会など、いろいろな事業を行っています。例年、夏休みには、子ども向けの本の著者を招いて、講演会を実施してきました。

今年はどなたがよいか、春以来の懸案事項でしたが、「夏といえば…サイエンスよねえ」と係二人の意見が一致し、科学の分野の方をお願いすることにしました。そうして、講師としてお招きすることになったのが、鳥取環境大学教授の小林朋道先生です。

小林先生は動物行動学の研究をされている方で、著作には、「先生、巨大コウモリが廊下を飛んでいます!」「先生、シマリスがヘビの頭をかじっています!」など、研究室の動物や学生たちの珍事件を動物行動学の視点で描いたものが多数あります。動物と学生をこよなく愛する小林先生の間人味あふれる本で、動物好きはもとより、多くの人の共感を得ています。

小林先生には、講演と「何か子どもたちが実際に取り組めるものを」とお願いしたところ、「シロアリを送りますから」とのお返事がありました。でも、どうやって、松山まで送ってくださるのでしょうか。折りしもの暑さ、シロアリたちは無事やって来られるでしょうか。

心配は無用でした。シロアリたちは、固められた木屑の巣の中で、元気に鳥取から松山までやってきました。それもクール便で快適に。



小林先生は、インターネットで拝見するよりもずっと日焼けされていました。この夏も、フィールドワークをなさっていたのでしょうか。

参加者は定員いっぱいの50名あまり。小中高生とその保護者がほとんどですが、中には「小林先生ファン」とおぼしき、熟年の方々も一番前の席に陣取っておられました。

「動物はなぜ、そう行動するのか」と題した講演では、シマリスが天敵であるヘビをかじる行動について話していただきました。

なぜ、あんなにかわいいシマリスがそんなことをするのか。シマリスはヘビの臭いを体に付ける「擬臭」行動をしているのだそうです。それを解明するために、どのように仮説を立て検証していったか、研究の過程を子どもにも分かりやすく話していただきました。

後半の演習では、「シロアリの行動を探る」というテーマで、シロアリの道しるべフェロモンについて調べる実験を行いました。

シロアリはボールペンの線を外れずに歩きます。なぜそう行動するのかを、「ボールペンの色に反応する」「においに反応する」などという仮説を立て、話し合いながら班毎に実験していきました。科学の方法を実際に体験できて、参加者は大満足でした。「意外とかわいい」とシロアリの気に入った女子高生も。



著者から直接話を聞くことで、文字の向こう側にある著者の思いを知ることができます。体験を伴うと、さらにいっそう実感を伴って理解することができます。

子どもたちが、小林先生の著書はもとより、動物の本を手にとったり、動物行動学に興味を持って関連の本を読んだりして、読書を広げていってくれたらと思います。それとともに、将来の可能性も広がっていくことでしょう。子どもと本との出会いを今後も応援していきたいと思います。

さて、実験後のシロアリたちは、どうなったか。小林先生にお伺いしたところ、「帰してください」とのことで、丁寧にクール便で鳥取にお帰りいただきました。お疲れ様でした。

(子ども読書係 田中 ひとみ)

# 愛媛県立図書館の東日本大震災への対応

このたびの東日本大震災で被災された方々に、心からお見舞いを申し上げます。ここでは愛媛県立図書館の東日本大震災に対応した取り組みをご紹介します。

## 1 関連 Web 情報へのリンク集の作成とミニ展示「地震・津波に備える」の実施

まず震災直後には、さまざまな情報が錯綜していたため、情報の交通整理を行う必要性を感じ、官公庁のものを中心としたウェブ情報へのリンク集「東日本大震災に関する情報」を作成しました。次に、愛媛でも近い将来に南海地震が発生すると言われており、地震や津波への備えについての関心が高まっていると考え、これらの関連図書と防災関連のパンフレットを展示しました。実際によく利用されています。

## 2 被災住民の方への利用カードの発行

次に、東日本大震災で被災された方で愛媛県並びに県内の市町が受け入れた被災住民の方、そして愛媛県に避難されている被災住民の方で、青森県、岩手県、宮城県、福島県、茨城県、千葉県に住民登録されている方を対象に、借出しの際に必要な利用カードの登録ができるようにしました。これまでに約10名の方が利用者登録をしておられます。

## 3 被災地の地元新聞等の提供

さらに愛媛県に避難されている被災住民の方々や、被災地へのボランティア活動に取り組まれている方々などへの現地情報の提供として、地方新聞とタウン誌の購読・提供を開始しました。新聞は『岩手日報』(岩手県)、『河北新報』(宮城県)、『福島民報』(福島県)、『茨城新聞』(茨城県)の4紙、タウン誌は『月刊 acute』(岩手県)、『S-Style』(宮城県)、『月刊シティ情報ふくしま』(福島県)、『こおりやま情報』(福島県)、『月刊みと』(茨城県)の5誌を提供しています。茨城県の情報の提供、そしてタウン誌の提供は全国的に見てもあまり行われていません。

## 4 ミニ展示「東日本大震災被災地のいまを知る～女川町を中心に～」の実施

震災から3ヶ月が経過した6月には、愛媛県社会福祉協議会が支援を担当した宮城県牡鹿郡女川町の現状を伝える展示を実施しました。同協議会より提供された現地の写真を中心に、町民の方が作られた

ミニコミ誌「うみねこタイムズ」やご当地ヒーロー「リアスの戦士イーガープロジェクト」なども紹介して、被災の状況だけでなく、復興に向けて立ち上がった女川町の方々の姿もお伝えしようと思いました。



ミニ展示の様子

## 5 関連パンフレットの配布

図書館が所蔵する図書・雑誌、そしてウェブ上の情報だけでなく、求められている情報が掲載されているパンフレットを取り寄せ、来館者の方々にご自由にお持ち帰りいただきました。例えば放射能と健康のかかわりについて書かれた『わかりやすい放射線と健康の科学』((財)放射能影響研究所) 身近で実践可能なストレスケアの指針をまとめた『災害時のこころのケア』(英治出版)、被災者の方々の復興に向けた暮らしに役立つと思われる「制度」や「手続き」などの情報をまとめた『復興のための暮らしの手引き』(第一東京弁護士会)などです。いずれもよく持ち帰られていて、関心の高さが窺えました。

最後にミニ展示を実施した際にご協力いただいた女川町の方からのメッセージを紹介します。

「震災は今回の宮城のように、いつ訪れるかわかりません。愛媛県民の方々にも強い防災意識を持っていただければと思います。二度とこの悲劇を繰り返さないためにも。」

このメッセージをしっかりと受け止め、愛媛県立図書館では今後も東日本大震災関連の情報提供を継続して行ってまいります。

(相談係 天野 奈緒也)

## レファレンス・サービスをご利用ください

レファレンス - 当館では平成 19 年 4 月より 3 階に専用カウンターを設けていますが、このカウンターを利用されたことはあるでしょうか。

また、利用したことはなくても、本年 4 月から各階カウンター上部に看板を掲げていますので、目にしたことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。



3階・一般図書室の左端のカウンターでは、着席してレファレンス・サービスを受けることができます。

レファレンス・サービスとは、「情報を求めている利用者に対して、図書館員が提供する個人的援助。貸出と並んで近代図書館の利用サービスの中心となる業務とされている。」というものです。（『図書館用語集 三訂版』日本図書館協会 2003 年発行より）

当館では、皆さまから寄せられた質問に対して回答となる資料（本や雑誌など）を提供したり、簡単な質問の場合は資料に書かれてある内容をお答えしています。これには司書という資格を持つ職員が当たっています。

例えば、『坂の上の雲』等で愛媛県ともゆかりのある作家・司馬遼太郎に関して、このような質問をされたとしたら、司書はどのようにして回答を見つけるのでしょうか。

『花神』という本は図書館にありますか。

司馬氏が宇和島市で講演をした時の内容はどのようなものですか。

司馬氏のお手伝いさんに、宇和島の人がいたそうですが本当ですか。

と は当館のホームページの蔵書検索から該当の図書を見つけることができます。

は、書名と作者名を掛け合わせて検索すると、単行本 4 冊と全集本 2 冊があることがわかります。

は、書名を〔宇和島〕と〔講演〕で掛け合わせ、さらに作者名も掛け合わせると『司馬遼太郎全講演第 3 巻（朝日新聞社 2000 年）』の目次に「宇和島の独創性」という項目があります。これかもしれないとあたりをつけて、3 階の一般図書室で請求記号〔914.6 / 刈 3 / 2000〕を探して中身を見てみます。「宇和島の独創性」は p168～181 にあり、1991 年

9 月 29 日に宇和島市で行われた講演「歴史と人間」のことでした。

では、はどうでしょう。書名の検討が見つからないので蔵書検索では探せそうもありません。ここは日頃多くの資料に接している司書の力の見せ所です。司馬遼太郎に関してはこういう資料があったなという鼻を利かせて、氏の伝記や評伝が置いてある書棚にあたります。『司馬遼太郎伊予の足跡』（アトラス出版 1999 年 請求記号 K910.268 / 刈 / 1999）の p96 や p106 に名前が出ていました。なお、この図書にはと同じ講演録が掲載されており、より詳細に掲載されています。

ちなみに、Google で〔司馬遼太郎〕〔お手伝い〕〔宇和島〕のキーワードを掛け合わせて調べても、宇和島出身の方はいたようですが名前まではわかりませんでした。（平成 23 年 9 月 1 日調査時点）



“レファレンス”と実感していなくても、カウンターで発せられる質問こそがレファレンスなのです。どうぞお気軽におたずねください。調べ方のコツを心得ている司書がおこたえします。

全国の図書館のレファレンス・サービスの内容を、インターネットで見ることができます。

レファレンス協同データベース

・トップページ <http://crd.ndl.go.jp/jp/public/>

・Twitter（国立国会図書館関西館図書館協力課）

[http://twitter.com/crd\\_tweet](http://twitter.com/crd_tweet)

・愛媛県立図書館のデータを抽出したもの

<http://crd.ndl.go.jp/GENERAL/servlet/list.reference?id=2110043>

（図書整理係 木下 和幸）

## 住民生活を支える「まちの図書室」に行ってきました 訪問日9月2日

### 愛南町御荘文化センター図書室

愛媛県の最南端の町愛南町の「御荘文化センター」は、愛南町御荘支所に隣接し、ホールや会議場を擁する複合施設です。図書室はその入り口に入って正面にあります。

床面積 69 m<sup>2</sup>の小さな図書室ですが、明るい木肌の木製書架には約5千冊の蔵書が並び、同じ仕様の閲覧机と椅子が置かれた静かで落ち着いた空間になっています。図書には分類ラベルは使わず、「社会科学」「医学」など本の内容ごとにカラーシールをつけて、シールの色ごとに並べられるようになっています。書店のような並べ方ですが、図書館の書架のような整然さが保ちにくいのが悩みだと、担当の職員の方は言われていました。

新規受入図書は、職員の方が話題の本やベストセラーを中心に選んでいる他、住民の方からアンケートをとって希望に応えられるようにしているそうです。

「郷土の歴史」の棚もあり、当館でもおなじみの県生涯学習センターや新聞社発行の調査資料・図書などが並べられていました。郷土図書のすぐ前の棚には角川日本地名大辞典が揃っています。

\*\*\*\*\*

貸出しは愛南町民一人3冊2週間、開室時間は9時から17時、毎週火曜日が休室日です。



図書室カウンターの様子(愛南)

### 宇和島市立岩松公民館図書室

岩松公民館は、合併前は旧津島町の中央公民館でした。合併前からボランティアによるおはなし会や学校への巡回文庫貸出しなどが定期的に行われ、現在も継承されています。また、蔵書の電算データ化準備も合併前には完了していて、合併後の平成19年に宇和島市立図書館の2館(中央館、吉田館)とともに蔵書検索システムを稼働させています。

図書室は、元は倉庫や車庫のあった部分を大幅に改修し、広いワンフロアに約4万冊の図書が公開されています。元の公民館図書室は閉架書庫として使用されています。絵本コーナーの壁一面に絵本『スイミー』のワンシーンが貼り絵で再現されていますが、これは個人のボランティアさんが中心となった労作。その他、館内の掲示や展示は図書館サポートボランティア「夢のたまご」の皆さんがお手伝いしてくださるそうです。

すぐ隣が岩松小学校、近くには津島高校があり、平日でも午後には放課後の児童・生徒たちがやってきて思い思いに過ごす姿が見られるそうです。

図書室一押しの資料は、町内の2団体から寄贈された大型絵本のコレクションで、おはなし会のときにもよく利用され、子どもたちに大好評だということです。

\*\*\*\*\*

貸出しは宇和島市民一人5冊2週間、開室時間は8時30分から17時、毎週土曜日が休室日です。



9月の展示テーマは防災(岩松)

(普及係 水野 千恵子)